

<シンポジウム>

女性のしごとと自立 —— ギャスケルの場合

司会・構成 鈴 江 璋 子

自立とはなにか。かりに、信念と判断力を持ち、自己の責任において自己の行動を律すること、と考えてみると、これは男女の別なく適用されうる概念であり、とくに「女性の」とうたう必要はないだろう。いや19世紀英国の家父長制社会においては、これはむしろ男性の美德であって、女性においては実現し難い美德——むしろ悪徳であったかもしれない。家父長制の下で女性は無知で無垢な、保護されるべき存在であり、男性が下した判断に従順であることが「女らしい」美德とされていたのであるから。

自主的に判断し、行動するためには、経済面においても隷属者でないことを立証する必要がある。参政権があること、収入があること、職業があることは、女性が社会的に一個の存在であると認められる助けになるだろう。しかしギャスケルの時代においては、女性に参政権はまだ認められていなかった。既婚女性が職業を持つことは極めてまれであった。19世紀中葉のイギリスにおいては中産階級の場合、一家の生計は専ら夫の収入によって維持されていた。夫の収入だけで一家の生活費、住居費、子弟の教育費等を賄うことができた、あるいはそうあるべきであって、妻が何らかの職業に就いて家計を助けるという事態はほとんど考えられなかった。妻は専業主婦として育児・家事・社交等、家うちの管理に専念し、たまにボランティア活動に参加する「家の中の天使」であるべき存在であって、妻が独立した職業・収入を持つことは社会通念として許されなかった。また現実社会においても、洗濯婦やメイド、お針子など下層クラスのための職業はあっても、中産階級の既婚女性のためには職業と呼べるほどのものはなかった。

家庭の中においても、一家の資産の管理は夫の仕事であり、妻は資産状況について十分に知らされていなかった。妻は法律・経済などの社会のルールには暗く、夫の仕事の内容をほとんど理解していなかった。つまり法律や経済の知識に暗い、時には読み書きも出来ない「天使」が家のなかにいたのである。夫や父親、つまり一家の経済を支える男性が突然いなくなったとき、妻や娘が路頭に迷うというメロドラマは、19世紀英米文学において多くの作家によって数限りなく書かれ、読者の涙を誘ってきたが、彼女たちは「かわいそう」として書かれ、読まれたのであって「愚か」とは描かれず、見なされてもいなかった。実は彼女たちは保護してくれる男性がいたときから、すでに社会的に「ハンデイのある」「かわいそうな」存在だったのであるが、『メアリ・バートン』(Mary Barton)、『ルース』(Ruth)、『シルヴィアの恋人たち』(Sylvia's Lovers) などをはじめ多くの作品において、ギャスケルは保護してくれるべき男性を失った中産階級の女性の戸惑いを描き、さらに制約の中で自己発現を目指す女性を描き、また対照的に、無心に単純労働に従事する労働階級の女性の姿を書き込んでいる。ギャスケルの描く女性をしごとと自立という観点から考察し、英国ヴィクトリア期の自立する女性に関する理念と現実を探るのがこのシンポジウムの目的である。



本稿は平成12年(2000年)10月8日、実践女子大学において開催された日本ギャスケル協会第12回大会におけるシンポジウム『女性のしごとと自立——ギャスケルの場合』をもとに加筆・構成したものである。

大会当日のシンポジウムは司会・構成：鈴江璋子、講師：足立万寿子・宇田朋子・小柳康子・鈴江璋子によって行なわれた。講師間の連携、聴衆の参加も活発で、熱心な質疑応答のうちに女性の自立にかけるギャスケルの理念と、それと隔たりのある現実の様相が明らかになった。